

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	講師	松本 亜香里
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋音楽大学大学院音楽研究科修士課程修了	修士	保育学、幼児教育学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画

(理念)

学生一人ひとりが互いの特性を認め合い、多種多様な意見を受け入れ、誠実さをもってかかわり合っていく。

(目標)

ゼミナールをはじめ担当授業において、学生一人ひとりが自分の考えや意見をもって、保育者および教育者の同志として互いに認め、高め合う関係を構築する。

(方針)

将来、保育者および教育者となる学生が、多様性を受け止め認め合える学びの環境づくりを心掛ける。

(計画)

教授内容が多い科目、特に学外実習関連の場合は、学生が見通しをもって受講できるよう、授業冒頭に本時の目的を提示し自由度をもたせつつポイントを押さえて記入できるレジュメ作成を行う。また、討論や発表において学修効果が期待できる科目においては、安心して意見が出し合えるよう十分に時間や空間を確保しつつ、小グループだけでなく全体への意見共有を行い、人の前で話すという経験も積む。発表時には、教員が意見まとめを行うのではなく、学生自身の気づきを可視化できるような工夫を各科目において行う。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

教育実習Ⅰ（幼稚園）、教育実習事前及び事後の指導（幼稚園）、子育て支援、専門演習Ⅰ、保育実習事前指導ⅠA

(後期)

子ども家庭支援論、専門演習Ⅱ、保育実習Ⅱ事前事後指導、保育実習指導ⅠA、保育内容総論、幼児と身体表現

○教育方法の実践

教育実習指導では、初等教育コースと幼児教育コースでクラスが分かれていたため、各コースの学生がこれまで受けてきた指導を鑑み、実習の心構えや日誌と指導案の書き方の指導を初めて実習に臨む学生と保育実習を踏まえて幼稚園実習に臨む学生とで内容を工夫した。また、両コースの学生が互いの学びを共有するために模擬保育や実習報告会では合同授業とした。

子育て支援と子ども家庭支援論では、学生がイメージしやすいように、活字の事例だけでなく、実際に映像を見て理論と実践がつながられるよう学生同士で討論を重ね、その結果を共有し全体で総括していった。両科目において、毎回課題を提示し、予習と復習を含めて知識の定着と他者の見解に触れることによる援助技術の拡充を図った。

専門演習では、学生の知的好奇心に合わせて演習内容を組み立て、後期ではその成果を大学祭に

において子どもへの遊び提供へとつなげた。

保育内容総論と幼児と身体表現では、両コースの1年生が保育内容や保育に関する授業を紐づけながら4年間学び続けられるよう、科目名を出したり事例や実践から領域間のかかわりを考えたりしながら理解を深められる工夫をした。学生の理解や気づきの状況を確認するため、毎回レポートを課し、それに合わせて翌週以降のところで全体で確認を行った。

保育実習指導では、担当者間での共通理解を確認しながら進めていった。各自の実習の課題設定については、特に丁寧に履修者と担当者で実習計画書を通して指導を重ね、実習課題に対しどのように実習では観察や考察を深めると良いのか、意思的に実習を行うことを目指した。

○作成した教科書・教材

毎回要点をスライドにまとめ、解説や要点が書かれたレジュメへのメモを促すことにより、事後学習時に振り返りが円滑にできるよう工夫した。

○自己評価

教育実習指導では、学生のこれまでの学びに配慮した授業進行について改善の余地が見られる。次年度は合同クラスでの開講になるため、より一層教授内容の精査が求められる。今年度については、教育効果を期待して行った合同クラス実施の結果、感想の中でその教育効果とみられる内容がいくつか挙がっていた。次年度は、逆にコース別で行う週も設ける必要も鑑み計画していく。子育て支援や子ども家庭支援論では、現代の子育て環境や社会情勢を理解したうえで、事例をスモールトークと全体共有を織り交ぜて実施した。活字だけではイメージしにくいことも、実際でもあるように、見えない要支援者に対するアプローチの仕方等、回を重ねる毎に学生同士の議論が深まったように感じられた。その結果として授業評価アンケートでは、理解が深まったという感想が多数みられた。

演習授業では、大学祭での子どもとのふれあいの場において、学生自らが空間的環境、音環境、人的環境を工夫し、遊びをサポートできていた。それは、演習授業の中で、履修学生同士のコミュニケーションが授業を通して深まっていたから、臨機応変にそれぞれの気づきを実行に移せたものだと考えられる。今後の課題としては、実践的な演習内容が多いため欠席が多い学生に対して、どのように学びを担保していくのか検討する必要がある。

保育実習指導では、担当者双方で学生一人ひとりと実習計画について丁寧にやりとりを重ねた結果、保育実習Ⅰが初めての实習であるにもかかわらず、各自の方向性がしっかりしていた成果か、日誌の書き方や指導案の書き方について実習期間中、実習生からの相談の連絡や実習先からの日誌に関するご指摘はほとんど見られなかった。保育実習Ⅱにおいても、保護者支援や地域とのかかわりなど、子どもとのかかわりに加えて保育者の多様な役割についての理解が深まったように、学生の自己振り返りシートの中から読み取ることができた。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- ①子どもの「楽しさ」に関する研究
- ②子育て支援のあり方について

○目標・計画

(目標) ①子どもの「楽しさ」に関する研究について、客観的データを収集し分析を行う。

②子育て支援について現施策と今後の動向を鑑み、子育て支援の展望とあり方の検討を行う。

(計画)

- ①「環境を通した保育」が打ち出される中で、子どもが「楽しさ」を感じる環境ならびに要因

について、継続して研究している。それというのも、保育における「楽しさ」についてはっきりとした定義がなく、保育実践や子どもの発達段階等の研究はなされている中で、その本質となる「楽しさ」に関する研究が少ないからである。これまで保育者への意識調査や文献調査を行ってきたが、客観的データとしての実践を試みたい。そのために、保育現場での活動を限定して調査を行い、数値化したいと考えている。

- ②保育の本質を探る中で、現代の日本において課題となっている「子育て支援」について、現在の施策と今後の政府の動向を鑑み、子育て支援のあり方と保育者養成段階での教育に求められる内容について一考察を進める。そのために、まずは愛知県内の子育て支援の現状と県ならびに市の施策を探り、政府が公開している現状と比較検討を行う。

○2016年4月から2024年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・高御堂愛子，植田光子，木許隆編著，松本亜香里ほか『保育者をめざす 楽しい音楽表現』圭文社，第3章Ⅳ．あそびうた①わらべうた，pp. 71. 84-85，2017年
- ・民秋言，安藤和彦，米谷光弘他編著，松本亜香里ほか『新保育ライブラリ 幼稚園実習[新版]』北大路書房，第3章4節保育教材の用意と指導の心構え，5節子どもたちとの関わり，第4章実習が終わったら，pp. 107. 109-111. 138-139. 142，2020年

（学術論文）

- ・松本亜香里・桂山たかみ「保育内容「言葉」の指導法に関する一考察（1）ー絵と言葉を用いた楽譜作成の取り組みから領域間連携の展望ー」『ユマニテク教育研究所紀要』第3号，pp. 18-25，2024年
- ・桂山たかみ・松本亜香里「絵と言葉のリズムによる打楽合奏曲作成への試み①ー子どもがリズムを理解する一助となる絵と言葉の楽譜の検討ー」『ユマニテク短期大学紀要』第7号，pp. 43-50，2024年
- ・松本亜香里・伊藤喬治「保育内容5領域をつなぐ視点の学びー表現指導法の授業実践から保育内容総論とのつながりを試みてー」『ユマニテク短期大学紀要』第5号，pp. 43-52，2022年
- ・桂山たかみ・松本亜香里・山野栄子「こどもが器楽合奏を楽しむ足がかりとしてー独自楽譜の保育者養成校での取り組みからー」『ユマニテク短期大学紀要』第5号，pp. 30-42，2022年
- ・松本亜香里「保育内容の領域間をつなぐ学びの一考察ー模擬保育活動の振り返りとして「ねらい」を考える実践からー」『ユマニテク短期大学紀要』第5号，pp. 14-21，2022年
- ・松本亜香里・伊藤喬治「保育者志望の学生のこどもを対象とした言葉がけに関する一考察（1）ー保育実習指導Ⅱの授業実践からー」『ユマニテク短期大学紀要』第4号，pp. 10-19，2021年
- ・横井一之・松本亜香里・永井弘人「デンマーク語の童謡を日本語で理解する指導についての試みー「保育環境論」における替え歌作りの実践と領域「表現」の視点からー」『東海学園大学教育研究紀要』第6号スポーツ健康科学部，pp. 107-117，2021年
- ・松本亜香里「幼児歌曲におけるピアノ伴奏の運指法に関する一考察」『ユマニテク短期大学紀要』第3号，pp. 18-25，2020年
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「保育者養成テキストからみる「楽しさ」に関する研究ー保育教材としての「手遊び」を中心にー」『ユマニテク短期大学研究紀要』第3号，pp. 12-17，2020年
- ・伊藤喬治・松本亜香里「保育者養成校学生による理想の保育施設像に関する一考察ー保育実習指導の授業実践からー」『ユマニテク短期大学紀要』第3号，pp. 5-11，2020年
- ・松本亜香里・堀建治・渡邊明宏「ゼミナールにおける学生の主体性と学び合いー保育教材作成および教材研究の取り組みからー」『三重幼児教育文化研究会幼児教育文化研究』第5号，pp. 25-

35, 2020 年

- ・横井一之・松本亜香里「フィンランド語の童謡を日本語で理解する指導についての試みー保育環境論での替え歌作りの実践よりー」『東海学園大学教育研究紀要』第 5 号 スポーツ健康科学部, pp. 109-117, 2019 年
- ・松本亜香里「小麦粉粘土活動からみる保育者志望学生の表現の過程と環境」『ユマニテク短期大学紀要』第 2 号, pp. 17-26, 2019 年
- ・渡邊明宏・松本亜香里「保育における身体表現の指導に関する考察」『ユマニテク短期大学紀要』創刊号, pp. 134-140, 2018 年
- ・松本亜香里「表現活動における保育教材研究ー多角的な視点を目指してー」『ユマニテク短期大学紀要』創刊号, pp. 101-107, 2018 年
- ・桂山たかみ・松本亜香里ほか「子どもの表現を助長する劇の効果音ー音楽表現の視点からー」『ユマニテク短期大学紀要』創刊号, pp. 42-54, 2018 年
- ・堀建治・松本亜香里「「楽しさ」に関する基礎的研究ー「手遊び」をてがかりとしてー」『三重幼児教育文化研究会幼児教育文化研究』第 3 号, pp. 19-26, 2018 年
- ・松本亜香里・渡邊明宏「表現あそびの指導法（その 1）ー音楽表現のあり方を新幼稚園教育要領・保育所保育指針から探るー」『三重幼児教育文化研究会幼児教育文化研究』第 3 号, pp. 27-34, 2018 年
- ・村木清子・松本亜香里ほか「幼児から児童（小学校低学年）における歌唱指導について」『大橋学園紀要』第 4 号, pp. 56-60, 2017 年
- ・松本亜香里「こどもの歌のブレスに関するー考察ー歌詞を味わい歌の世界観を感じる表現を目指してー」『大橋学園紀要』第 4 号, pp. 35-43, 2017 年
- ・松本亜香里・桂山たかみほか「ピアノを用いた音楽表現を教員自らが楽しむためにー初等教育（幼稚園、小学校）教諭養成課程におけるバイエル教則本の指導から探るー」, 『三重幼児教育文化研究会幼児教育文化研究』第 2 号, pp. 18-31, 2017 年

(学会発表)

- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その 12）ー手遊びを中心にー」日本保育学会第 76 回大会（オンライン開催・熊本学園大学）, 2023 年度
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その 11）」日本保育学会第 75 回大会（オンライン開催・聖徳大学）, 2022 年度
- ・桂山たかみ・松本亜香里・山野栄子「こどもが器楽合奏を楽しむ足がかりとして（2）」日本保育学会第 74 回大会（オンライン開催・富山大学）, 2021 年度
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その 10）ー新型コロナウイルス下における「手遊び」の実態を中心にー」日本保育学会第 74 回大会（オンライン開催・富山大学）, 2021 年度
- ・桂山たかみ・松本亜香里・山野栄子「こどもが器楽合奏を楽しむ足がかりとして」日本保育学会第 73 回大会（奈良教育大学）, 2020 年度
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その 9）ー手遊びをてがかりとしてー」日本保育学会第 73 回大会（奈良教育大学）, 2020 年度
- ・松本亜香里「実習における指導計画案のてがかりとして（2）ー表現活動の教材研究から探るー」日本保育学会第 72 回大会（大妻女子大学）, 2019 年度
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その 8）ー手遊びをてがかりとしてー」日本保育学会第 72 回大会（大妻女子大学）, 2019 年度

- ・松本亜香里「実習における指導計画案のてがかりとして－表現活動の教材研究から探る－」日本保育学会第71回大会（宮城学院女子大学），2018年度
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その7）－手遊びをてがかりとして－」日本保育学会第71回大会（宮城学院女子大学），2018年度
- ・山野栄子・松本亜香里「保育学生の乳幼児の絵本に関する意識調査Ⅰ」日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学），2017年度
- ・堀建治・松本亜香里「「楽しさ」に関する基礎的研究（その6）－「手遊び」を中心として－」日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学），2017年度
- ・松本亜香里・桂山たかみ「幼児歌曲伴奏法－バイエル教則本を教材としたコード奏研究－」日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学），2017年度
- ・松本亜香里・桂山たかみ「保育者養成課程におけるピアノ指導に関する授業運営について」日本保育学会第69回大会（東京学芸大学），2016年度
- ・山野栄子・松本亜香里「乳児の絵本の一考察Ⅲ」日本保育学会第69回大会（東京学芸大学），2016年度
- ・堀建治・松本亜香里「「楽しさ」に関する基礎的研究（その5）－「手遊び」を中心として－」日本保育学会第69回大会（東京学芸大学），2016年度

（特許）

なし

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

日本保育学会、日本保育者養成学会、全国大学音楽教育学会

○自己評価

日本保育学会では、5月の大会において研究目標①に関し手遊びを「共振」「楽しさ」という観点から事例考察を行い、座長を中心に活発な意見交換がなされた。子ども同士の「共振」、子どもと保育者の「共振」について、より多くの逐語から分析を広げていきたい。今年度は着任1年目につき、フィールドワークに出向く機会を積極的に設けることができなかったため、次年度以降たくさん事例を集める計画である。

上記同様、②について論文執筆も年度内での書き上げができなかったため、次年度に繰り越すこととする。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

「真に信頼して事を任せうる人格の育成」の建学の精神にのっとり、自らが与えられた職務（新設組織である広報委員会）において、真摯に取り組んでいく。

（計画）

ソフト面では学生指導、諸々の大学運営業務との連携、そしてハード面では委員長をはじめとする委員でターゲットに合わせた効果的な広報活動を検討していく。

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、広報委員会

○自己評価

課程部会では、議事録を担当し滞りなく遂行することができた。広報委員会は新設であるが、毎回の委員会において、委員長のリーダーシップのもと、広報委員会で取り扱うべき範疇を確認しながら広報課と連携ととっていた。その中で、委員としてこれまで勤務してきた大学での取り組みを共有したり、他大学の広報媒体をリサーチしたりして貢献できるように準備をしていた。広報課の準備が毎回万全になされており、自身の知識や準備が十分でないことを痛感した。そのため、次年度は委員会運営に貢献できるよう、大学広報媒体にとらわれず、さまざまな広報アプローチについて見識を広げていきたいと考えている。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

保育に関連する研修会の講師や運営に関する委託業務をもって、研究成果を社会へ還元する。

(計画)

研究成果の発表により、研究成果を社会に共有するとともに、学会での研究交流から得た知見を教育活動に還元する。

○学会活動等

全国大学音楽教育学会 紀要編集事務局 (2023 年～現在)

○地域連携・社会貢献等

市立四日市病院託児所運営協議会評議員 (2022 年～現在)

○自己評価

着任1年目のため、近隣のネットワークが乏しい中、9月名東区子育て支援ネットワーク連絡会主催の「名東区子育てミニ広場」など、本学で開催があったイベントでは自分のできることを積極的にかかわることができた。もともと参加する親は子育てに関心の高い方が多いが、そこで大学祭を案内したことにより、キッズ広場でも何組か9月に参加いただいた方が来場されていた。このことは、巡り巡って本学の広報につながったと考えられる。今後は本学のフィールドである名東区や名古屋市に貢献できるよう、研究や教育を通してかかわりを広げ深めていきたい。市立四日市病院託児所運営に関して、評議員として運営内容や保育士確保について意見を求められ、ネットワークの発足や活用などを提言した。

V その他の特記事項 (学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

学会や研究会へ積極的に参加し、研究・教育へのモチベーションを維持し向上させる。

VI 総括

教育活動については、計画に沿って準備を入念に行い、計画を達成することができた。そのため、ゆとりをもった学生対応を行うことができた。研究活動については、一部遅れが見られるものの適当な資料の収集と情報の整理までは行うことができた。共同研究では、役割と目標を遂行することができた。大学運営では、着任1年目でありながら幼稚園実習の主担当として、副担当の教員や教務課職員、学科の協力を得て実習の管理運営を行うことができた。また、オープンキャンパス模擬授業の講師を担当して、大学の広報に貢献した。次年度は着任2年目となるため、すべての活動において、より一層の貢献と大学教員としての役割の遂行を目指す。

以 上